
浄土(じょうど)の日常

赤色烏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浄土じょうどの日常

【Nコード】

N7382U

【作者名】

赤色烏

【あらすじ】

すべてが科学の力で叶う近未来のちょっとした日常を描く話。

通り雨

きれいだった青空は、いつの間にか真っ暗に変わり、大粒の雨が降り注ぎ始めた。

あまりに急な雨に、思考が働かず、周りの人間は一瞬立ちすくむ。うっすらと灰色がかったアスファルトが、次々と黒に染め上げられてゆく。

それを見てようやく現実を理解した人々は、傘^{かさ}を出すなり、近くのビルに飛び込むなりして雨をしのぎ始めた。

私は傘を持っておらず、雨宿りを選択したうちの一人となった。足元にはねてくる水を眺^{なが}めながら、朝のニュース番組を思い出す。事務的な笑顔の天気予報士は、今日の天気を今月一番の快晴と表現していた。

何が快晴だ。その顔に心の中で悪態^{あくたい}をつきながら、空を見上げる。

空はまだ暗く、雨は止む気配を見せない。

買い物袋に入った本が濡^ぬれないように、私はもう少しビルの奥に引っ込むことにした。

一步、二歩、三歩。壁に当たった。

これだけ下がれば大丈夫だろうと判断して、私は壁にもたれかけた。

少し乱れたマフラーを直して、濡れた服をチェックする。

もしも私が人間だったら、風邪^{かぜ}をひかないか注意する必要があるだろう。

「大丈夫かい」

私の横一メートルほどのところに、一人の男が、私と同じようにもたれかかっていた。

その視線がこちらに向いていることを確認して、ようやく男が声をかけた相手が自分だと理解した。

大丈夫です。

小声で告げて、マフラーを外す。

中に見えたであろう雪のように白い首輪、くびわ認識票、にんしきひょうを確認して、男は納得したこのようにこちらを見つめた。

その眼に好奇心が表れていることを確認して、私は仕方なく男と話すことにした。

「私の主人は私が首輪を見せることが嫌いです。夏場にマフラーをしているほうがよっぽど気持ち悪いとは思いますが、私の意見を聞くような人ではありませんから」

「首輪を出さないのは条例違反じょうれいはんじゃなかったかな？」

「罰金千円なんてどうでもいいと、主人は申しておりますよ」

目の前に立っている男は、細かいことで警察に連絡するようには見えなかった。

むしろ付きまとわれて、自分が目立つほうがよくないだろう。

実際、真実を教えられて、楽しそうにすることはあっても、携帯で通報を始める様子はなかった。

「君は面白いね。気に入ったよ」

「ありがとうございます。私は静かなのが好きなのです」

「そうか、名前は？」

「……」

驚くぐらいに話がかみ合わない。

やんわりと混ぜた拒絶きよぜつの意思は、あっさりと無視された。

人間の中には無礼な、相手のことを考えない奴がたまにいるが、彼はそういう人間とは違うにおいがした。

それゆえに、私も彼に興味を持ち、会話を続けることにしてみた。

雨はまだやむ気配を見せない。

「そちらから名乗るのが筋でしょう？」

「生意気な奴だな」
なまいき

あまり立場などを考えずに話せる相手と分かり、私も少しずつ、話し方を楽にし始めた。

相手はそんな自分に対して怒ることもない。

「やっぱり名乗らなくていいよ」

「そうですか」

私は別に相手の名前に興味などなかったが、逆に拒否されると、何か理由があるのではと勘繰ってしまう。

「まあ、犯罪者はんざいしやとかいうわけではないけどね。俺は自分の名前言うのが好きじゃないだけ」

私の“心”を読んだのか、男は釈明した。

犯罪者かどうかの疑いはそんなもので晴れるわけもないが、もともと私もそんなことはあまり気にする性格ではない。

素直に、気にしませんよ、と返すと、男はまだ疑われているのかと、一瞬むっとした顔になった。

「俺は佐藤だ。よくある名前だろう」

「私が偽名を名乗るのなら、その苗字みょうじを名乗りますね」

「これが偽名だと？ 本名で悪かったな」

「わかりました。佐藤様ですね」

「それでよろしい」

ああ、君はやっぱり面白い奴だな。男、いや佐藤はそう言うときと笑った。

私には人間のツボ、というものがよく分からない。

「こっちは名乗ったぞ」

そういえば、こちらの名前を聞くために向こうは苗字を明かしたのだ。

しょうがない、名乗るか。

私には名前が二つある。が、たぶん相手の望む名前は愛称あいじょうのほうだろう。

もう一方は聞いたところで仕方がない。

「小口こぐちです。小さいの小に、入口の口」

「ふうん、由来ゆらいは？」

「本の裁断面さいだんめんです」

相手が固まった。

確かに本というだけで疑問詞が付く相手に、本の各部名称かくぶめいしょうは分からないだろう。

私だって、今と違う人生を歩んでいたら、こんな言葉を知るはずもない。

「本、好きなの？」

「私の主人はね」

そればかりか本屋を運営していると知ったら、この男はどんな顔をするだろうか？

うちの主人と違って、このご時世に働く人間はあまりいない。

もっとも、うちの主人“が”働いている様子はめったに見ないのだが……。

「俺も好きだよ、たまに読む」

見た目からはそんな雰囲気ふんいきはしない。

むしろ寝転がって漫画を読んでいそうな、少しおしゃれなどこにでもいる人間。

眼鏡めがねをかけていれば、もう少し知的には見えるかもしれない。

「嘘うそじゃない。信じるよ」

「ええ、信じます」

「信じてないだろ、お前」

「信じていますよ。」

私は微笑ほほえみで相手の反応を遮る。

男は怪訝けげんな顔でこっちを見た。

私は笑ってその視線を受け流す。

「雨、止みそうですね」

降り続いていた雨が、急速にその勢いを落とし始めていた。
天気予報は当たらない。

私が今日新たに認識した“常識”だった。

その学習ができた点だけ、今日の雨には感謝している。

「止むだろうさ。ただの通り雨だ」

「通り雨？」

これが通り雨ですか……。

私がつぶやくと、また男は怪訝な顔でこっちを見つめた。

「どうかしましたか？」

「いや、やっぱり変わっているな、お前」

見知らぬ通行人にいきなり話しかけるのも、よっぽど変わっていると思うのですが……。

人の振り見て我が振り直せ。少し使う場面を間違えているのかもしれないが、今の私にはその言葉がしっくりきた。

私もこの男みたいにおかしなことをしないように努力しよう。

私は静かなのが好き。余計なことは嫌い。

あまり目立たないようにしたい性格である。

すくなくともそういう設定だったはずだ。

あたりがまた、騒がしくなってきた。

周りを見渡すと、さっきまで傘をさしていた通行人が、一様に傘をしまい始めている。

さらに、近くの建物からは、広がる油のように人がダラダラと溢れ始めた。

この建物も例外ではない。

ごめんよ、と声をかけながら人が二人の横をすり抜けてゆく。
相当迷惑をかけてしまっているのは明白だった。

「雨、止みましたね」

「ああ、そうだな」

続いて、カメラのストロボのように、サッと太陽光が顔を直撃した。

黒いアスファルトにしみ込んだ水が蒸発をはじめ、むっと湿度が上がり始める。

本には良くない気候だ。

おそらく人間の機嫌きげんにもよくない影響を与える気候である。

今夜の不快感指数はどこまで上がるのだろうか？

主人の機嫌が心配だ。早く帰らなければ。

「それでは急いでいるので――」

「気をつけるよ」

頃合いだな、と判断して、私は軽く会釈をすると、目的地に向かって走り始めた。

久しぶりの全力疾走ぜんりょくしつそつ。足元の水たまりが跳ねて、靴が汚れていく。後ろで男も軒下のきしたを出たことは、雰囲気で分かった。

突然会話を打ち切るのは失礼だったかな？

男の姿が振り返っても見えない場所まで行ってから、ようやくそんなことを思った。

後悔先に立たず、そういえば男の名前もしっかり聞いていなかった。

まあ、何かしてもらったわけでもないし。いつか。いつか偶然会ぐうぜんうこともあるでしょうし。

その偶然は、思いがけないところで起こることになる。

日本晴れ

雨はあまり好きではないが、かといって余り降らないとその湿っぽさも恋しくなってくる。

特にこんな、暑くてつらい日は……

「小口！何をしている。さっさと直さないか！！」

「あまり暑苦しい声出していると、もっと暑くなりますよ。ご主人様」

止月書店しつきしやてんの店長、つまり私の職場の上司である志筑優仁しきゆうにはイライラしていた。

そのイライラは明らかに暑さのせいで、早く雨でも降らないかと私は思っていた。

よりによって店主が“遊びに”来る日にエアコンが壊れるとは、この世界には本当に神様なんかないのだと思わせられる。

もしいるとしても、私たちロボットには非常に厳しい神様なのだろう。

そうとしか思えない。

店の中は外の気温とほぼ同じ、いや、閉め切られている分やや高めの温度となっている。

早くエアコンの修理が終わらないと、本に致命的なダメージが、つまりカビという障害が与えられることになってしまう。

機嫌の悪い人間は嫌いだが、少なくとも私は本のが好きだった。

そんな私は大嫌いな肉体労働、機械整備に努めている。

開店早々の店にのこのことやってきた主人は、起動したばかりの私と、エアコンが壊れているという事件に遭遇した。

私としては耐用年数をはるかに過ぎたエアコンが機能しているのは奇跡だと思ってきたのだが、わが主人はその奇跡を長続きさせようと、つまり古いエアコンを使い続けようと、私に修理を頼んだ。いや、命令した。

優しく爽やかそうな名前とは裏腹に、厳しくいかめしい主人は、命令に逆らおうという気力がわかないほどに恐ろしい。

さらに、私たちロボットに拒否権は存在しない。逆らうことなどできないのだ。

だが、提言はできる。

私は必死に、近くに新しい機械修理屋ができたこと、最新式エアコンの素晴らしさ、ネット通販での値引きセールをアピールしたが、主人はすべてを無視していった。

一時間もの説得の後、私はしぶしぶ茶色く小汚い修理ツールを手に、慣れない機械解体を始めた。

記憶によれば、今は修理を始めて二時間三十五分十三秒になる。

作業はさっぱり進んでいない。

エアコンの“解体”はだいぶ終わっているのだが、どこが悪いのか全く分らない。

当たり前だ、私にはエアコンの仕組みなんかさっぱりなのだから主人もそのことは知っているはずなのだが……惚けてきたのか。直せといった手前引くに引けないのかもしれない。

私としては後者であってほしい。

私は主人に小口という名前を、相当ダサイと思っている名前を貰っているが、本名は豊川バイオロイド19シリーズ業務用4311

2609だ。

見た目はほとんど人間そっくりで、区別することも困難な高級ロボット（自称）である。こんなん

主な使用目的は商品販売。機械操作は得意じゃない。

まあ、それを言い訳にするつもりはないけれど、何か言い訳でも吐きたくなる。

私と主人の目の前には、無残に解体され、元の形にすら戻らなくなった、外付け式の旧式エアコンだったものが散らばっていた。

今回ばかりは、さすがの私も反省していた。

とりあえず解体してみようと思ったのが三時間十五分八秒前。四十分前に主人が寝てからはさらにハイスピードで解体を続けた。その結果がこれだ。

ナットとネジにまで解体されたエアコンが、そこにはあった。

主人の顔が赤くなったり、丸々一分間動かない。

よっぽど怒っているらしい。

そろそろ私も覚悟を決めたほうがいいかもしれない。

よくてクビ、悪くて解体工場行だろう。

エアコンを解体して自分も解体されるなんて、何かのギャグとは思えない。

だが、現実だ。

うちの主人なら、嬉々（きき）として自分の手で解体すらしかない。

「小口、ちよつと……」

ほらきた、運命は私に微笑むのか？

クビになったら次はどこに就職しようか？

「頭が痛い、……呼んでくれ」

「え？」

様子がおかしい？どうしたのだろう？

振り返ると、主人が先ほどと同じ態勢で頭を抱えていた。

「救急車だよ。呼べ！！」

「はい!!」

後ろで主人がうめき声をあげる。

幸か不幸か、お仕置きはなくなったな。などと不謹慎なことを考えながら、私はスリッパを鳴らしながら近くの電話機に駆け込んだ。

「ただの熱中症ですね。ちゃんとエアコンをつけてください」
駆け付けた医療用ロボットからはこんな言葉をいただいた。

その後そいつは、最近のロボットは主人の体調を気にすることもできないのかという愚痴を延々とつぶやき続け、厭味たらしく、最後は「もう二度とこんなことで呼ばないでください」とつぶやき去って行った。

今日は本当に厄日である。

「小口、そいつを片付けろ」

後ろでは主人がエアコンの欠片を指さしながら氷水に足を付けている。

こっちはあまりに暑すぎて回路もモーターも焼付きそうなのにいいご身分だ。

実際相手は私の主人であり、いい身分でもある。

人間とロボットの力関係のひどさにちよつと泣きそうになった。

「エアコンは好きに買っておけ。できるだけ安くな」

よつこらしよ、と立ち上がり、やっと帰宅することに決めた主人は、そう命じた。

「ふぁーい」

できるだけ安くという言葉は気になるが、この暑さから解放されるならどうでもいい。

本当に、私は雨の涼しさが恋しかった。

日本晴れ（後書き）

ゆっくり書いていきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7382u/>

浄土(じょうど)の日常

2011年7月19日03時25分発行